なかとみいせき

中臣遺跡発掘調査現地公開資料

1999年８月10･11日
(財)京都市埋蔵文化財研究所

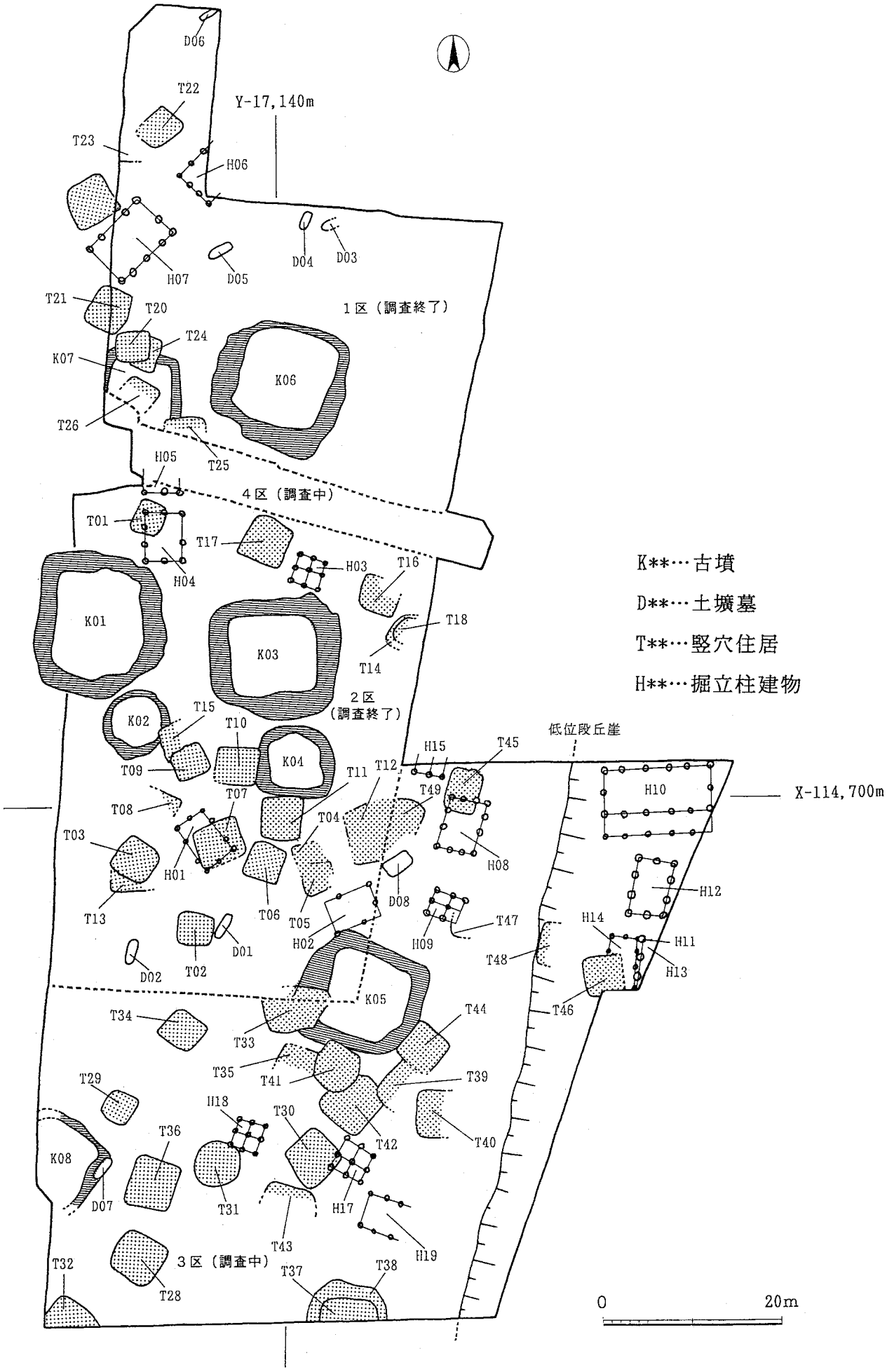
中臣遺跡は、山科川と旧安祥寺川の合流点から北にひろがる大きな遺跡です。ここには、旧石器時代（約20,000年前）から室町時代（約500年前）にかけての人々の生活の跡が埋もれています。この遺跡の79回目の発掘調査を昨年11月から行なっています。１区（約1,500㎡）と２区（約2,000㎡）の調査をすでに終了し、現在は３区（約3,000㎡）と４区（約400㎡）を調査中です。これまでに古墳時代後期から飛鳥時代（５～７世紀）のものを中心に古墳８基、土壙墓８基、竪穴住居49棟、掘立柱建物15棟などを検出しています。また、土師器や須恵器などの土器をはじめとして、当時の道具類が多く出土しています。

古　墳は、溝を四角く掘って、その内側に土を盛り上げ小さな山を作り、そこに死者を埋葬した墓の一種で、村のなかでも身分の高い人が葬られていたと考えられます。今回の調査で見つかった古墳は５世紀の後半から６世紀にかけてのものです。盛土や死者を葬った部分が後の時代に削られなくなってしまっているので、周りに掘られた溝だけが残っていました。それぞれの古墳の溝の中から、完全な形の土器５～６個がきれいに並べられている状態で見つかっています。葬式や供養の儀式の跡と考えられます。

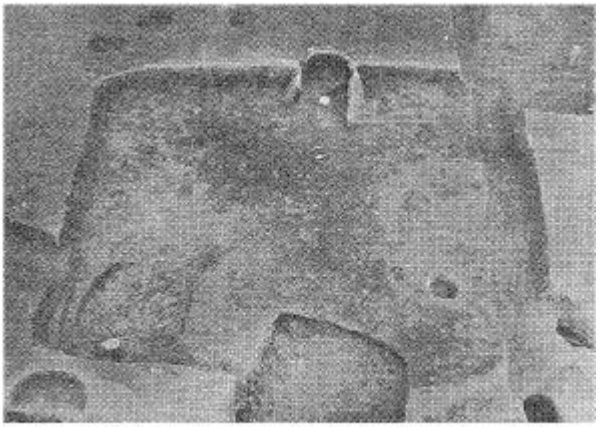
土壙墓は、長さ２～３ｍの細長い穴を掘り、その中に木製の棺を埋めただけの墓です。棺や遺体は土にかえり残っていませんでした。古墳より少し遅れて６世紀の前半から終わりごろに作られています。古墳ほど作る手間のかからない簡単な構造の墓ですが、棺の周囲に土器などを供えて手厚く葬っている様子や、古墳と同じほどの数しか見つかっていないので、一般の民衆の墓ではなく、比較的高位の人物の墓と考えられます。

竪穴住居は、地面を四角形に掘りくぼめ、底の面を土間とする建物で、木の柱を立て屋根と壁が草でできていたと考えられる建物です。建物の木材や草屋根、草壁は地中で腐ってしまい残っていませんが、カマドの跡や柱を据えた穴が残っています。竪穴住居が重なりあっているのは、何度も建て替えられているからです。一度にこれだけの数の家が建っていたわけではありません。これらはいずれも７世紀のものです。

掘立柱建物は、平らな地面に柱を据える穴を掘り、そこに柱を立て、屋根は草、壁は木材などからなっていたと考えられます。この建物には倉と住居の２種類があります。倉は柱を田の字型に配列した正方形の建物で、床を高くして中に米などを蓄えていたと考えられます。床を高くするのは、湿気やネズミなどから食料を守るためです。長方形の掘立柱建物は、竪穴住居よりも少し進歩した形式の住居と考えられます。最も大きなH10は豪族の屋敷の一部と考えています。いずれも、７世紀から８世紀にかけてのものです。

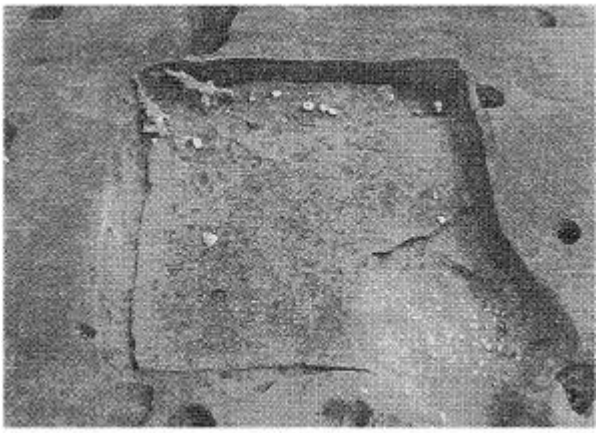


主要遺構分布図 (1:600)

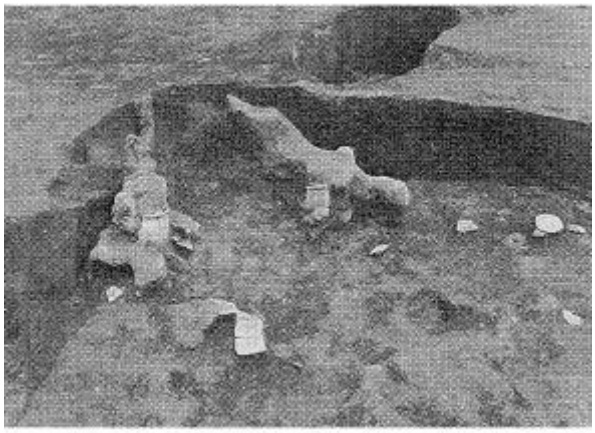


竪穴住居跡（Ｔ１１）

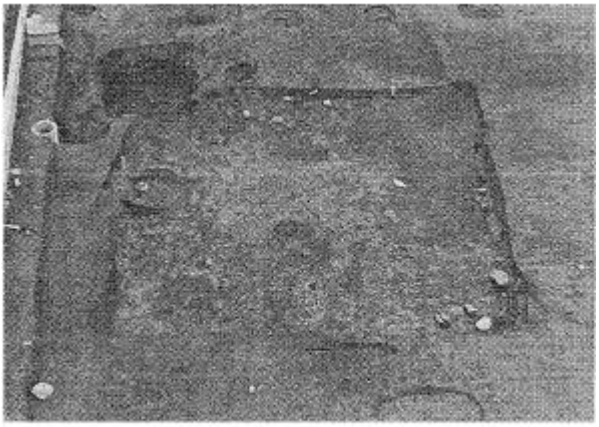
竪穴住居跡（Ｔ１１）カマド



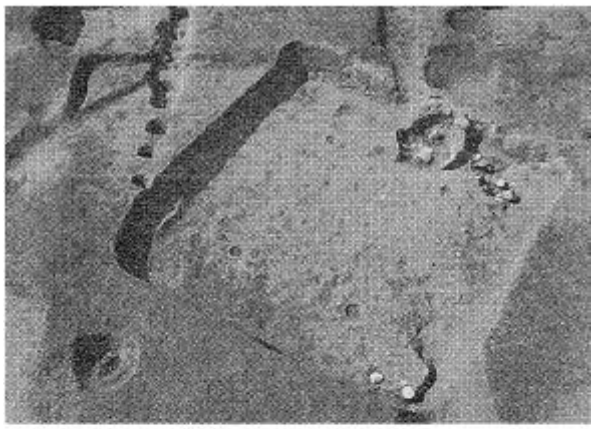
竪穴住居跡（Ｔ１０）



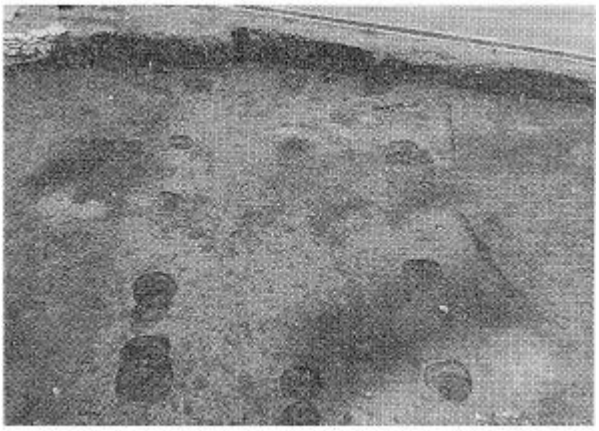
竪穴住居跡（Ｔ１０）カマド



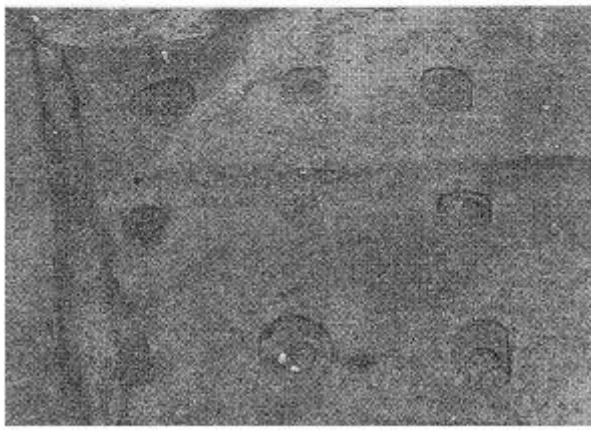
竪穴住居跡（Ｔ１７）



竪穴住居跡（Ｔ０３）

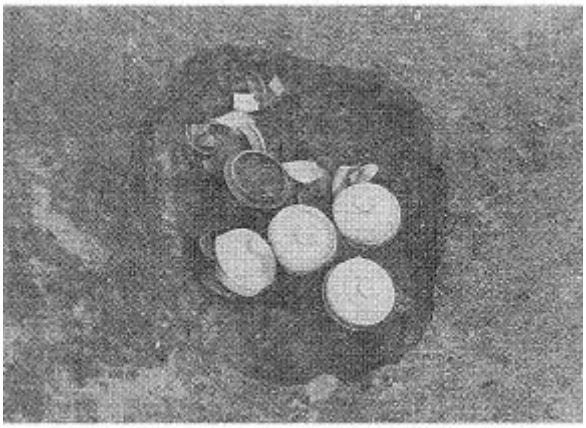


掘立柱建物跡（Ｈ０４）

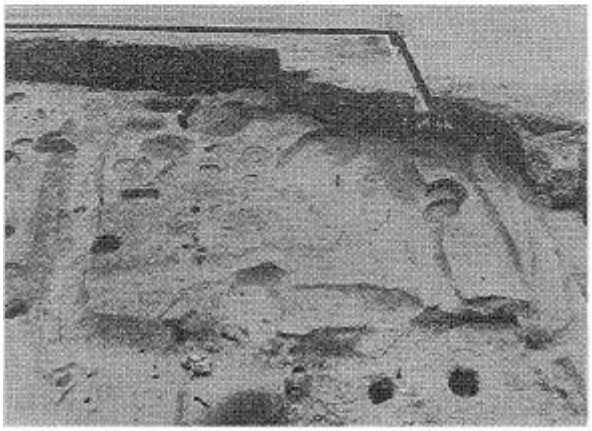


掘立柱建物跡（Ｈ０３）

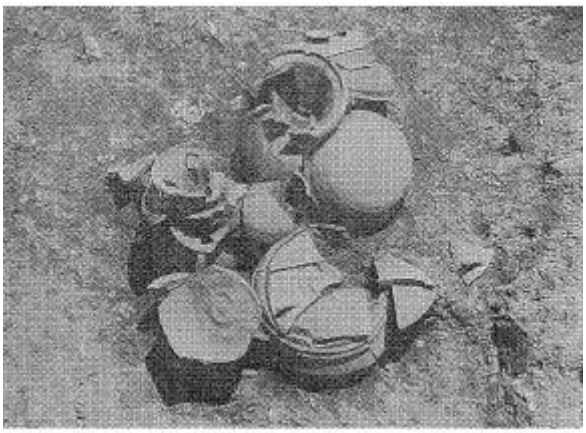
古墳（Ｋ０３）



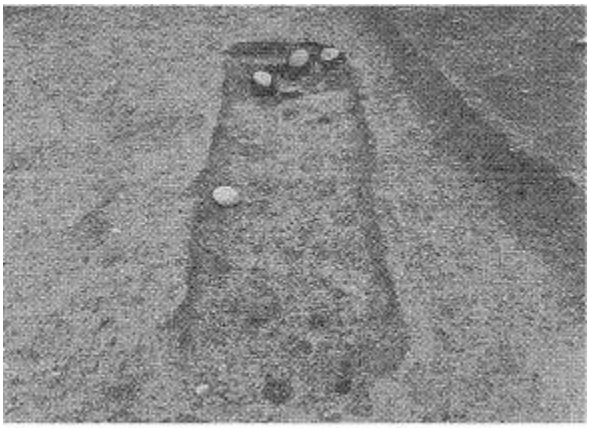
古墳（Ｋ０３）に供えられた土器



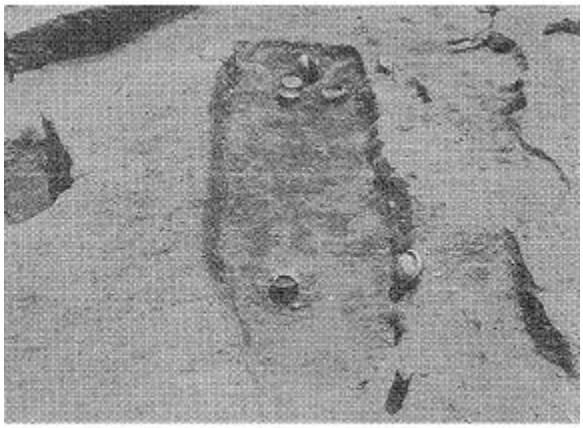
古墳（Ｋ０７）



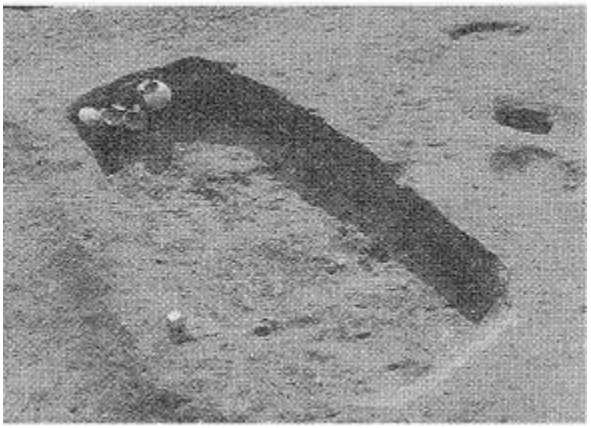
古墳（Ｋ０７）に供えられた土器



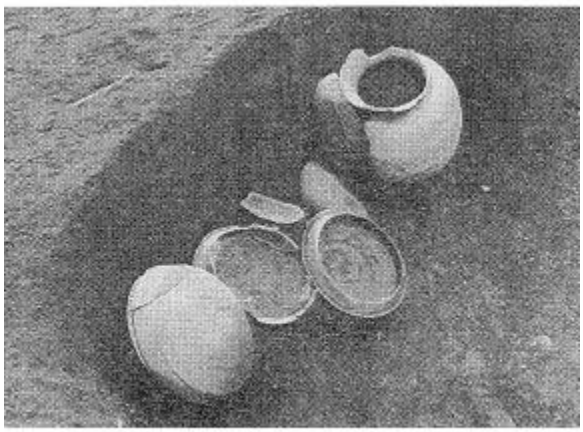
土壙墓（Ｄ０１）



土壙墓（Ｄ０７）



土壙墓（Ｄ０２）



土壙墓（Ｄ０２）から出土した土器